

## 優秀賞

# 遺品が動かす人の心

長野県 長野市立昭和小学校六年 布谷 紗都子

六年生のはじめに社会の教科書が配られた時、母の実家がある広島、原爆ドームが目に入りました。毎年八月六日八時十五分に、家族でTVの前で黙とうする時に映る、建物です。

私は、その時に、およその話は両親から聞いていましたが、実際に、今でも残っているものを自分の目で見て、戦争はどれほど怖いかを知りたいと思うようになりました。

そこで、原爆投下当時、隣の街からキノコ雲を見たという祖父母と共に、この八月十一日、平和記念公園を訪れました。

電車を降りると、レンガが崩れ、コンクリートの柱は折れてぶら下がり、鉄骨だけが残っている原爆ドームを間近にしました。写真で見るよりも、はるかに、原子爆弾の破壊力が伝わってきました。

資料館東館に入ってすぐのところには、被爆前の広島、被爆後のその二つの大きなパノラマがありました。

民家が建ち並び、先程のドームも緑と白の美しい産業奨励会館であったのが、一瞬にして、全てが灰色の焼土と化され、まるで天国と地獄のような変わり様が、一目瞭然でした。

そして、遺品や被爆資料が展示されている本館に進みました。そこで目にしたものは…五千度という熱線で「人が影の形に残された石壁」、遺体となった中学生が抱えていた「黒こげの弁当箱」、熱風で折れ曲がった頑丈な鉄扉、爆風で飛び散ったガラス

が一面に刺さったタンス、熱や放射線により病変した人々の皮膚や爪の標本、写真…。

私は、突然、頭がガンと打ちつけられたような感じになり、説明文だけ読んで素通りしてしまいたくなりました。祖父母が前日に、「居たたまれないようなショックを受けるよ。」

と話していた通りでした。

「もう、充分、戦争が恐ろしいことは分かった。」

でも、見なくては、残して亡くなった人に失礼になる。」

何とか、自分に言い聞かせながら、思い直し遺品の一つ一つをがんばって直視しました。

「もし、自分の住んでいる街が、家族が、友達、このような状態になったとき、自分は何をしたらいいだろうか。」

私は、見ているうちに、仲良しの友達にも、近所の人にも、日本だけでなく世界中の人々、この資料館に一度は訪れてほしいという気持ちになりました。

まず一人ひとりが、自分の目で遺品をしっかり見てほしいのです。そして何が起こったかを知り、自らの心が動き、「もし、身近でおこったら…」と、自らのこととして考え、思いを強くすること。そうでないと、戦争を知らない私たちの世代は、平和への切望を持ち続けることができないのではないのでしょうか？

その、一人ひとりの強い願いこそが、自分や自分の大切な人達の平和な生活を保持する原動力になると感じています。